

「雀」の涙

山本岳志

序

内田百閒は生涯に渡って、断続的にはあるが日記をつけ続けていた。その内、生前に自身の意志によって纏められたものが、三冊の形となつて残っている。昭和十年及び十一年に相繼いで刊行された『百鬼園日記帖』と『続百鬼園日記帖』は、大正六年から十一年までの記述をまとめたものであり、第一作品集『冥途』の上梓（大正十一年二月）に至るまでの時期、文士としての名前を得るより以前の消息を知る数少ない資料となつている。

それに対して残されたもう一冊の日記『東京焼盡』は、時代下つて昭和十九年十一月一日から昭和二十年八月二十一日までの太平洋戦争末期、東京に空襲警報が鳴り出してからの生活の記録をまとめたもので、昭和三十年に刊行された。既に随筆家として作家として名のあつた百閒の、しかし筆を捨てることを余儀なくされた期間を埋める、前一冊にも劣らない貴重な筆跡である。

一冊のまとまつた刊行本として出版されたのは以上の三冊にとどまるが、百閒は生前様々な短章に日記の記述を盛り込んでいた。それは、一躍名前を世に知らしめることになつた『百鬼園随筆』（昭和八年）に収録された「梟林漫筆」にはじまり、戦争を過ぎて後の『阿房列車』連作（昭和二十七年～三十一年）を補う形の「雷九州日記」、なによりノラにク

ルツという二匹の愛猫を失つた経緯を綴つた『ノラや』（昭和三十一年）と『クルやお前か』（昭和三十八年）に挿入された日記と、後年に至るまで踏襲されていく。

これは日記という極個人的な記述が、作家という公に名前の知られた人物のものである限りは、作品として提示し得るといふ方法的な自覚を百閒が早い時期から保有していたためである故に思われる。

例えば『百鬼園日記帖』では、自身の手による凡例に「文章八推敲ヲ施シアラズ凡テ当時ノ日記帖ニ記入セル儘ナリ」と書く一方で多くの人名を仮称に改めていることも断つており、また特に明記されてはいないが時局に鑑みて不適切と考えられる箇所は削除や「むにやむにや」という伏せ字代わりの言葉の使用を行っている。つまり単純に日々の記録を写したものよりも、一個の意図を含有した作品という風に捉えていたのだらう。だからこそ、同じく凡例に「本書ノ性質上読者ガ拾ヒ読ミヲ避ケラレン事ハ著者ノ惻隠スルトコロナリ」という一文が添えられる意味がある。その場その場の抒情の断片的な集積でなく、一つの脈絡ある複合体が「本書ノ性質」であつてこそ、「拾ヒ読ミヲサケラレン事」を「惻隠スル」のだ。

カット・アンド・ペーストで一編のエッセイが完成させられるようなものである。切り取られた素材は張りつけられる場所によって、様々に変わった容貌を見せる。前記した「梟林漫筆」は一から八までの独立し

た掌編からなる作品だが、その中で全体の半分を占める最長の八は『百鬼園日記帖』の大正七年八月三十日の記述を抜き書きしたものであり、一つのヴァリアントを形成している。

この手法が最も多用されたのは、敗戦直後の事であり、日記から適宜抜粋されたものが題名を付され、作品として発表された。けれども、戦後の百間の殆どの著作を校訂した平山三郎の記述に「鬼園の琴所載「八月十五日の涙」は、終戦の年の八月十日から十五日までの克明な日記である。したがって『東京焼盡』のその日附の記録と、まったく同じである」とあるのが象徴的なように、あくまで『東京焼盡』に至るまでの場繋ぎとして小出しに、戦中の記録を語ったという認識しか与えられてこなかった。また平山の書くところの「まったく同じ」という言葉も語弊があり、句読点の打ち方や語句の細かな使用にとどまらない大きな差すらが、これら単発で発表された日記作品と『東京焼盡』の間には存在する。

そこで本論考では、戦後に発表された単発日記作品と『東京焼盡』の異同を示す事で、ヴァリアントとしての重要性の指摘及びそれら作品の必然性を明らかにしたい。

一 日記作品の分布

日記を引き写した作品が最も多く収録されているのは、敗戦後最初の単行本となった『新方丈記』（昭和二十二年）である。本文百二十頁の薄い本のうち、六割以上が日記作品となっている。これを皮切りとして、以後『東京焼盡』まで断続的に日記作品は発表されていく。

これを発表順に並べてみると以下のようなようになる。括弧でくくったのは、『東京焼盡』での該当箇所の日付である。

二

「灰燼」 『新潮』昭和二十二年二月号（昭和二十年五月二十四～二十六日）

「新方丈記」 『新潮』昭和二十一年五月号（昭和二十年五月二十六日～三十日）

「餓鬼道日記」 『小説と讀物』昭和二十一年八月号（昭和二十年七月十三～十五、十七、十九日、二十二～三十日、八月一日～七日、八月十七日）

「序に代へて」 編纂本『御馳走帖』昭和二十一年九月三十日発行七月

十三、十五、十七、十九日、二十二～二十七日、三十日、八月一日～四日）

「十六夜」 『べんがら』昭和二十二年一月号（昭和二十年一月二十七日）

「仰願寺蠟燭」 『新方丈記』書き下ろし、昭和二十二年二月一日発行

（昭和二十年五月二十六～三十日）

「雀」 『改造文藝』昭和二十四年五月号（昭和二十年二月二十六日）

「残月と焼夷弾」 『讀賣評論』昭和二十五年二月号（昭和十九年十二月

二十九～三十一日、昭和二十年一月～七日、十日、十一日、四月三十日、

五月七日）

「八月十五日の涙」 『世界』昭和二十六年八月号（昭和二十年八月十～

十五日）

『東京焼盡』 昭和三十年四月二十日発行（昭和十九年十一月一日～昭和

二十年八月二十一日）

ほとんどの作品が日記抄録であり、平山三郎が「まったく同じ」と断言した「八月十五日の涙」にしても、そのクライマックスの昭和二十年八月十五日の玉音放送の記述が終わった後にも、『東京焼盡』では更に数行が続いている。

また『東京焼盡』には凡例と言つべき「序二代ヘル心覺」が冒頭に掲げられているが、そこには『百鬼園日記帖』にあつた推敲等に関する記載は一切なく、最後に「原稿ノ整理ニ就キ平山三郎君ノ協力ガナカツタラコノ本八日ノ目ヲ見ナカツタデアラウ」とあり、本文が原本自身の引

き写しでなく取捨選択されたものであることを暗に示している。

ならば『東京焼盡』の成立はどのようになっているか。福武書店『新輯内田百閒全集』第二十三巻の「解説」で平山三郎自身が書いている。そもそも百閒の日記は当時囑託を勤めていた日本郵船会社の社員手帖並びに文藝春秋社の文藝手帖に書き留められていたものを、特に昭和十九年十一月一日以降の部分を改めて二冊の大学ノートに浄書したものである。この大学ノートの「第二冊」冒頭に次のような記述がある。

昭和十九年度郵船会社ノ日記手帖ヨリ昭和十九年十一月十二月及び
ソノ餘白ニ記入シタル昭和二十年一月ノ日記ヲ更メテコノ帖ニ寫シ取
ル 昨年末以来ノ日記ヲ假リニ空襲日記ト云フツモリニテ纏メテ見ル
トスレバ昭和十九年十一月一日ヲ以テ皮切りトスレバナリ 昭和二十
年六月六日記

なお、それ以前に関しては、この大学ノートに写されることはなかった。では、何故にこのノートが「第二冊」になっているのかといえ、
「第一冊」の記述が関与している。「第一冊」は昭和二十年二月一日には
じまるのだが、その巻首には『東京焼盡』に入っていない文章がおさめ
られている。²

昭和二十年 二月四日立春ヨリツケ始メル 二月一日木 十八夜 今
年八郵船会社ノ日記ノ手帖ガ未ダ出来テナイカラ去年ノ手帖ノ仕舞ノ
方ニツイテキル暮盤野ノ所ヲ使ツテ中タガ到頭一月中ハソレデスンデ
未ダ新シイノハ出来ナイ 「……」 大橋ガイツカ昔ニ文房堂デ買ツタ
豎野ノノートブックガ何冊カアルカラヤラウカト云ツタノヲ思ヒ出シ
ソレヲ貰ツテ今年ノ日記帳ニスル事ニキメタ コノ帳面ガソレデアル

この二冊のノートの日付については、百閒自体が書き残した備忘があ
る。³

第一冊 二十年二月一日ヨリ
全 七月四日マデ
第二冊 十九年十一月一日ヨリ
全 二十年一月三十一日マデ (p.35)
全 七月五日ヨリ (p.36以下)
全 歳末マデ
ツマリ右二冊ニテ
十九年十一月一日ヨリ二十年歳末マデ

つまり、昭和二十年二月まではあくまで個人的な記録にとどまってい
た日記が、六月六日までの間に第三者に触れることを前提とした一つの
形に纏めることが決意され、そのために結果として日付が錯綜すること
になったと読み取れる。

これによつて原本での『東京焼盡』の異本関係は次のようになる。

- (一) 日本郵船会社の社員手帖並びに文藝春秋社の文藝手帖 昭和十
九年十一月一日〜昭和二十年一月三十一日
- (二) 二冊の大学ノート 昭和十九年十一月一日〜昭和二十年八月二
十日

そして、「序二代ヘル心覺」にあつた様に、この本の刊行には平山三郎
が深く関与している。そもそも『東京焼盡』は少なくとも昭和二十二年
の段階で、刊行の意図がかなり明確化していたと考えられる。内田百閒

の単行本には、末尾に必ず著作目録がついており、初版の『新方丈記』には、その最終行に「昭和二十一年以降刊行目録」というものがあり、『新方丈記』に並んで『番町の空』という名前が予告されている。この『番町の空』は、いくつがあった。『東京焼盡』の候補名の一つである。日記は全て片仮名書きで、おまけに句読点が省かれている。それを平仮名になおし、句読点を配置、必要によっては改行を施さなければならなかった。加えて昭和二十二年では、空襲の日々もまだ目前の記憶であり、色々と差し障りがあることもあったのだらう、日記帖の記述は整理推敲が行わなければなかった。ところが、この仕事が遅々としてはかどらず、ついには諦められる事になる。けれども、空襲日記の刊行への熱意までもがうしなわれたわけではなかった。そこで白羽の矢が立ったのが、戦後の百間の殆どの著作の校訂を行っていた平山三郎であった。百間は原本の平仮名化を託す事になる。これが実際にどの時期かは、はっきりとした日付が残されていない。ただ、第三十六章、昭和二十年五月九日までは終了していて、渡された原稿用紙の余白に、

二十六年十一月三日ヨリ續稿

原稿ノ體裁ヲ従前ノ分ト照合スル要アリ

長ラク中絶シタノデ前ノ方ノ書キ方ヲ忘レタ

という走り書きがあったという事である。⁴更に平山三郎が「暮の休みに急いで仕上げた」と発言しており、おそらく二十七年か二十八年の後半の事でなかったかと思われる。二十六年ではまだ自ら原稿に向かう意志を見せているし、二十九年ではもともと『番町の空』は文藝春秋社から刊行されるはずだったのが講談社に変わっている事からも、二十九年の暮れに整理をして、百間自身による推敲訂正を加えて出版社を探すと

いう物理的な時間に無理があると思われるからである。

こうして平山三郎の手によって整理された原稿が、再び百間に戻り最終的な形に纏められたわけである。ただこの際、平山が百間の続きから整理を行ったのか、それとも改めて最初からはじめたのか、その辺りの事情もはっきりしない。だが、それでも、ここで新たに三種類の稿本が発生する事になる。

- (三) 百間自身がノートから原稿用紙におこした原稿 昭和十九年十一月一日～昭和二十年五月九日
- (四) 平山三郎の手によってノートから原稿用紙におこされた原稿
- (五) (四)をもとにして作られた原稿

以上のような時間と手間をかけて『東京焼盡』は刊行された。「原稿ノ整理ニ就キ平山三郎君ノ協力ガナカツタラコノ本八日ノ目ヲ見ナカツタデアラウ」と述べる由縁である。

二 検証作品について

本論考においては、「雀」と『東京焼盡』の該当する日付の文章の差違を検証したいと考える。数ある作品の中で、この「雀」を選択するにも理由がある。

まず他の各編が数日に渡る記述なのに対して、一日の出来事を抽出している点。それと殆どの作品が、それぞれの主題にあわせて抄録にとどまっているのに、ほぼ『東京焼盡』と同量の枚数が割かれている点。この二点を満たしているのは「雀」を置いて他なく、百間の日記作品のエッセンスを取り出すのに適しているという事が挙げられる。加えて、戦

争を挟んで、一年の間筆を断った時期をとり、一つの変化が戦後の百間の文章には現れる事になる。詳細は後に譲りたいが、この変化を眺めるのにも、「雀」は非常に相応しい作品となっているのである。

それでは以下、実際にこの二者の差を見ていきたい。文末の表を参照していただきたい。

三 「雀」と『東京焼盡』の差違

『新方丈記』上梓直後の昭和二十二年当時において、百間の中では『東京焼盡』刊行の意志が既に出来上がっていたことは述べた。つまり、少なくともそれ以後の日記作品については、重複することも厭わず敢えて発表する事に百間自身が何らかの意図を画していたと考えられる。

仮に『東京焼盡』の原稿整理が思わしくなく、単行本化を諦めた期間があったとしても、その埋め草として日記作品が書かれたとは考えづらい。これも前に引いた覚書が昭和二十六年六月に書かれており、「八月十五日の涙」までの作品はこの執筆期間にあたる事と、「八月十五日の涙」にしても覚書の日付と近すぎることから類推される。

では「雀」によって言おうとしていた事は、一体どのような事象であったのであろうか。

「雀」と『東京焼盡』の間の相違点で最も数が多いものは、句読点の有無もしくはその場所の違いである。この点については、原本である手帖もしくは大学ノートへの記入の時点で、句読点を省いていたことから起こるものである。段落変えの違いも同様に説明され得る。これらは文章上の差としては決して大きなものとは言えないが、二者が書かれるにあたって単純な引き写しをもって終了されたものではないことの傍証となるだろう。

次いで多いのは、てにをは及び語幹、漢字と平仮名、単純な修飾の相違である。これらについては文章の見た目や口にした際の聞こえ方といった百間の美的感覚の発露と考えられる。

比較的細かな違いは以上の二点でほとんど説明がつく。ならば大きく異なる部分はどうなっているか。これらも大部分が二つの理由からの変更と考えられる。

まずは文章の長さによる説明の言辞とレトリックの多寡。「雀」の冒頭である百四十一頁二行目以降の「四年前の昭和二十年……」に顕著なように、昭和十九年十一月からはじまっている『東京焼盡』であれば不要な説明的な文章が連ねられているところがある。百四十二頁十二行目の「玄關の土間のたたきに續いた」や百四十三頁十四行目の「お粥はいよいよ薄くなる可し」などがそれに含まれる。百四十二頁十二行目の「大雪の為に」以下は、二者間で最も大きな変動が認められる箇所である。文章は前後し、それぞれにレトリックが増されている。これは標題の「雀」からしていたしかたないところである。同様の違いは百四十三頁十行目の「二羽が後先になつて、向うの家の雪の積もつた屋根を越して行つたと家内が云つた」にも当てはまる。以上は冒頭の明らかにものを除いては、「雀」のために付加されたものか、または『東京焼盡』では文章がくどくなるために省かれたものか明確に区別する事は出来ない。

もう一つは時局的な状況判断からの変更である。「雀」の発表された昭和二十四年にはまだGHQも存在しており、『東京焼盡』の七十頁十行目「敵の機動部隊」の「敵」という文字が許されるはずもなかった。また敗戦からあまり日も経っていないという事もあり、個人的に近い人の名前を挙げる事も避けていたと思われる。七十一頁十一行目で「晦日二十八日になれば美野の所に配給ある由」と、娘の住む地域での配給

がある旨書かれているのが、「雀」では「よその」と変えられている。また同頁十三行目からの「先日中は古日の配慮にて……」の一文が「雀」ではぼつかり削除されているのも、親交のあった俳人大橋古日の名前がある点と、会社から正当とはいえない手段で米を借りていた点が公になれば他人に累が及ぶ事を警戒したためと思われる。これらは明らかに「雀」での変更と考えられる。

と、以上のように、それぞれの相違について考察してみると、「雀」と『東京焼盡』の間で、上記のものから逸脱するのはたつた一ヶ所を残すのみとなる。即ち、百四十三頁五行目の「ぢつとしてゐると……」からはじまる、捕らえた雀を晩飯にしようと考えているとふと涙ぐんではまう場面である。

四 「雀」の涙

正確にいうなら、この「ぢつとしてゐると」以後の文章もレトリックの増強の一部であることは違いない。ただ、百閒自身の行動及び感情吐露における文章の相違が、ここにしかないという点があり、さらにそれが涙に関わるものであるというところで大きな意味を持つてくるのである。

涙は百閒の文章において初期から晩年にいたるまで通して取り上げられてきた対象である。

『百鬼園日記帖』の大正六年十月二十日の記述に以下のようにある。

今私の書きたいと思つてゐるのは、一、私の心の中の神秘をかく。佛心寺の玄關、たよを材料にした小説。二、私の人間性の記録、「久吉に與ふ」など。三、社会生活の記録、いつか書きかけて止めたエグ

ツエーマの様なもの及び特に士官学校の私。「……」神秘は恐ろしき心で書く。人間性の記録は涙をつらねる結果に終るだらう。社会生活の歴史は自分に対する憫笑と人にかくれてするたちの悪い嘲笑である。

これらのうち、「私の心の中の神秘」は「恐ろしき心で書く」とあるように、「恐ろしい」という形容が連呼される『冥途』(大正十一年)や『旅順入城式』(昭和九年)に代表される創作作品によって、「士官学校の私」を例に挙げる「社会生活の記録」は終生に渡り執筆された随筆作品という形によってそれぞれ果たされたことから、この計画が必ずしも破棄されたものではないことが見て取れる。けれども、「涙をつらねる結果に終る」と予言された「人間性の記録」は、結果から先にいうならば、ついに満足な形で発表されるにはいたらなかった。

涙が流されるべき作品としての「人間性の記録」がどのようにとらえられていたのかについては、やはり日記帖に依る他はない。そのヒントとなるのは、作品名らしき「久吉に與ふ」という言葉である。この言葉が登場するのは、あと一ヶ所、大正六年九月二十七日の部分である。

此頃自然を憧憬する心が蘇つて來た。きりこの聲程私の心に秋意をそそのめるものはない。どこかへ旅行したい。三日が一週間ぐらゐ、音のない、空の見える、風の吹かない宿屋の離れか二階座敷に暮らし度い。さうして私は晝も夜も靜かに此帖を書きたい。「久吉に與ふ」「お父さんの佛を見る」「佛心寺の玄關の死神」「石ノ巻の藝者」などが書き度い。又町子への遺言も書き度い。

「此帖」とは即ち日記帖の事である。大正六年七月二十八日からつら

れはじめたこの日記には、冒頭にこう書かれている。

心の表を通り過ぎる印象、心の底から消えて行く記憶を此帳面に残す。

此頃の取りとめのない死の不安（考へてある内に此文句を書くのが恐しい、いやな気がした）が腹の底で此帳面を書けと云つたらしい。死んだ後に妻に丈でも何物かを残したい。しかし夫が何にならう。まだ死といふものをほんとに考へてゐないかも知れない。それから又創作の心覺えにしようとも考へた。これは眞面目であり役にたつ。

大正六年頃の百閒は絶えず死の恐怖と向かい合つていたという。それはおそろく前年の大正五年十二月の師夏目漱石の死を目にして以来の恐怖であつたと思われる。おまけに百閒は喘息や心因性の不整脈を患つており、この不安は決して妄想と言ひ切れない切迫感があつた。そこで考へられたのが妻にあてての遺書である。そしてそれと並列されている「久吉に與ふ」以下の作品であつた。久吉とは長男の名前であり、「久吉に與ふ」とは妻へのものと同様の子供にあてた遺言の代わりであつたと考へられる。

日記、大正六年十二月十日部。

私は子供を生んだ。その為に私は結婚前よりも一層死を怖れる様になつて来た。さうして今は、私は子供を生んでゐる、それ故に私は運命の都合によつては死んでもいい気がし出した。「子供によつて不死」なる事は親が死んだ後に初めて大事な事実になる。

創作小説の「私の心の中の神秘」に随筆作品の「社会生活の記録」、

これらを除けば、後に残るものは内田栄造としての生い立ち及び日常生活の上での「心の表を通り過ぎる印象」という事になる。つまり百閒にとつての「人間性の記録」とは生まれてから死ぬまでに会つた事象について自らがどう感じどう思つたかの記録であり、妻に残す遺書と同様に子供に向けて自分がいたということを保証し、同時に自分の存在を後世にまで刻み込むための装置であつた。けれども、既に述べたように、この記録は遂に書かれずに終わる。その理由については取り敢えずここでは、経済的な窮迫と長男久吉の急逝を挙げておくにとどめる。それでも流された涙は、それらの記録の残滓であつた。

百閒の最初の文集であり創作集である『冥途』には泣く場面が多く含まれている。それも目につつすらとためるといふのではなく、涙をぼろぼろとこぼして泣くのである。特に文中の視点保有人物である「私」がそのように涙を流す場面があるのは、全十八作品中九作品にも及ぶ。ところが第二作品集の『旅順入城式』になると、この数が急激に減少し、全二十九作品中わずか三作品にまでなつてしまつたのである。これは『冥途』刊行の大正十一年には、まだ「人間性の記録」を残す意志があつたのに対して、その後急速に冷めていつたのを示している。代わりに登場するのが、涙がこらえられるという描写である。

私は何だか考へ込む様な気持になつて、得体の知れない涙が目の奥の方に溜まつて来た。すると、じめじめした土間の四隅から、真黒などろどろしたものが盛り上がる様になつて流れ出した。さうしてそのどろどろしたものの中に、彼方此方に、幾つも幾つも巡査の目が溶け込んで、上つ面に覗いてゐるものもあり、底の方から光つてゐるものもあつた。（「女出入」）

この種の描写は『冥途』には見られず、『旅順入城式』になって突如として姿を現すものである。いよいよ百閒が家族に対して遺すべく思っていた「人間性の記録」を放棄しようとした過程が、この涙の喪失で表される。そして『旅順入城式』以降、「こらえる」という行動も含めて百閒の「私」の目から涙はぱたりと出なくなってしまうのである。

それが俄に回復されるのが戦後の『ノラヤ』以降である。飼猫であるノラがある日突然失踪し、姿を見せなくなった半年の間を日記の記述を主として描いたものである。「ノラヤ」「ノラヤノラヤ」「ノラに降る村しぐれ」「千丁の柳」の四作で四十ヶ所にもぼる涙の場面を記している。その涙の流し方も旅から帰り未だ戻らぬノラに涙する「千丁の柳」の末尾では「沓脱ぎに腰を掛けた儘、上にも上がらず泣き崩れた」と『冥途』に見られた他者を憚らない大粒の涙が復活している。ただこのノラにまつわる涙がそれまでとは異なる部分がある。百閒死後の座談会で平山三郎は「あの猫はとくべつ可愛がっていたわけでもないのです、私なども、はじめはそんな重大事件とは思わなかったのです」と語る。これが歳経ての感懐であったとしても、ひとまず今は関係がない。問題は近い存在であった平山などにも明らかにならなかった自らの思いを、涙に変えて語りはじめたという事である。これはあの放棄された「人間性の記録」に通じたものであった。

何故この時期になって再びこの涙が復活してきたのか。それはひとえに平山三郎に代表される百閒を囲む人々が大きな役割を果たしたといえる。法政大学の教授時代の生徒を含めて、百閒を中心とした師弟関係には独特なものがあつた。これについては川村二郎が「百閒の場合には、友達とかお弟子さんといった、彼にとって親しみの持てる人々は、客観的に言えば疑似家族ということになるんだろうけど、主観的には、本当に家族同様だったんじゃないかな」と語っている。「人間性の記録」は

家族に対して、自らの思つた事を遺すために書かれるべきものであつた。けれども、初期の文章からは、実際の家庭崩壊からその部分は喪失される。だが、学生であつた人々との関わりは、そうした家庭不和の後に築かれたものであり、ましてや平山三郎などの文章に惹かれてやって来た者には、作家として成つた以前は必ずしも語らなければならぬ内容ではなかつた。だからこそ、百閒の文章には法政大学時代の学生の名前は頻繁に登場するのに、家庭不和以前の陸軍士官学校、海軍機関学校時代の生徒は滅多に出される事がない。そして日記帖にもあつたように、『冥途』前後の百閒は自らの死を強く意識していた。この死の思いが復活した契機こそが、太平洋戦争の空襲と考えられないであろうか。事実、昭和二十年五月二十五日深夜から翌二十六日未明の空襲によって家を焼け出されている。『東京焼盡』の「序二代ヘル心覺」にも「アノ時ヨク死ナカツタト思フ」という一文が挿まれている。敗戦を迎えても明治二十二年生まれの百閒は、既に老境に足を踏み入れていた。『百鬼園日記帖』の当時とは異なり、それを払い除けるのも不自然であつただろう。

そして「雀」の発表されたのは昭和二十四年。還暦の年である。五月二十九日に鉄道ホテルで華甲の祝宴が開かれている。雑誌『改造文藝』に掲載されたのも五月号である。再び生まれ直す還暦の宴の中、「子供によつて不死」を再び体現すべく「人間性の記録」をつけようと試みる百閒。幸いにして周囲には子供と等しい昔の生徒や文章の心酔者が多くいる。だからこそ涙は復活したのである。

確かに、「雀」では最終的には涙は流されていない。「ふつと涙がこぼれさうになつた」。これではそれまでのこらえられた涙と変わるところがない。ところが、『改造文藝』昭和二十四年五月号に掲載されたのは「雀」一編ではなかつた。もう一つ「目白落鳥」という作品が収録され

ている。先程書いた昭和二十年五月二十五日の空襲で家財のほとんどを失った際、命からがら逃げおおせた中、ともに疎開させることが可能であった数少ない持ち出し。その中に一羽の目白がいた。「目白落鳥」はその目白が死ぬまでを綴った文章である。

今朝からいよいよ元氣なく、顔がきたなくなつた様だと云つてゐたら、到頭私の手の中で死んだ。小さな頭を指先で撫でてやり、いつ迄も涙止まらず。

同時にこの涙は百間の戦後文章の中で「私」が初めて流す涙でもある。雀や目白という小さな命に対する個人的な思いから浮かぶ涙。それは百間にとつては逆の道筋をたどり、目一杯にためられた後で、おもむろに解放される。年齢的にも死と向き合いつつ書くためには、遺すという形でしかなく、だからこそ自らの文章を校訂する外部の目としての平山三郎のような人物が必要でもあった。

そして『百鬼園日記帖』とは異なる意味での「人間性の記録」を書き連ねるために必要な準備として、涙が流れる筋道はつけられなければならなかった。そのために「雀」は選ばれ、そのためにあの涙に関する部分が発表されたのである。

「雀」の涙は外部からは感知できないほどにわずかなものにすぎなかったが、戦後においても百間が作家であることを示す咆吼であったのである。

注

- 1…平山三郎『実歴阿房列車先生』（朝日新聞社、昭和四十年）
- 2…『新編内田百間全集』第二十三巻（福武書店、昭和六十三年）平山三郎「解説」内に挿入されている。
- 3…同書。
- 4…同書。
- 5…高橋義孝、平山三郎、小林博「阿房列車、冥途へ旅立つ」（『噂』昭和四十六年八月号）
- 6…川村二郎、種村季弘「明晰なる精神薄弱 あるいは百間における自我」（『ユリイカ』昭和五十九年二月号）

（本学大学院博士後期課程）

頁 行数	「雀」(底本福武書店版全集第十二卷)	頁 行数	『東京焼盡』(底本福武書店版全集第二十三卷)
141 二	<p>四年前の昭和二十年二月二十六日は月曜日の十三夜であった。当時は日本郵船の囑託として、水曜日の外は毎日午後から出社してゐたが、その日は大雪の翌日にて省線電車が心許なく、行く事は行かれても夕方の帰りが心配だから出かけるのを見合はせた</p> <p>よりも、もつと 四十年振りの大雪</p> <p>来襲機は、午後の にして、宮内省の目抜き</p> <p>覆ひし 煙は矢張り神田の大火であつた。六百機なり</p> <p>傳はつて 雨戸を外からどすんどすと揺すぶつた 午前一時</p>	69 十二	<p>二月二十六日月曜日。郵船不出社。大雪の翌日にて省線電車心許なく、行く事は行かれても帰りが心配だから見合はせた</p> <p>よりももつと 四十年振りとかの大雪</p> <p>来襲機は午後の にして宮内省の目ぬき</p> <p>おほひし 煙は神田大火であつた。六百なり</p> <p>傳はり 雨戸をどすん、どすんとゆすぶつた 一時</p>
142 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三	<p>晝間の大空襲の</p> <p>一時大分 家内もさう云ふし、これからは</p> <p>来襲にも寝た儘ですまさないで</p> <p>ところがラヂオの放送は、洋上の機動部隊の</p> <p>云へる由なり。何事もなく、八時</p> <p>今朝も焚くお米</p> <p>こなひだも晩に 駒鳥の飼桶に 飼桶の障子を</p> <p>行つたら、雀が</p> <p>這入つて、鶇の</p> <p>雀がどこから 事によると玄關の土間のたたきに續いた</p> <p>水抜きの</p>	70 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六	<p>晝間の空襲の</p> <p>一時は空襲に対して大分 これからは</p> <p>来襲にも寝たままで済ます様な事をせず</p> <p>ところがラヂオ放送は敵の機動部隊の</p> <p>云へる由。何事もなく八時</p> <p>今朝もお米</p> <p>こなひだの晩も 駒の飼桶に 障子を</p> <p>行つたら雀が</p> <p>這入つて鶇の</p> <p>どこから 事によると水抜きの</p>

頁 行数	「雀」(底本福武書店版全集第十二卷)	頁 行数	「東京焼盡」(底本福武書店版全集第二十三卷)
142 十二	大雪の為に外の餌が拾へないから、腹がへつてゐるのだらう。人の影を見て、あわてて飛び立ち、硝子戸の明かり先を上へ上へばたばた傳はつてゐるけれども、上の方から出て行く隙間はない。驚倒した雀に、気を落ちつけてどこから這入つて来たかを思ひ返し、土間へ下りて、羽根をすばめて、水抜き穴から脱出すると云ふ様な分別が起こるわけもない。捕へた。羽根を散らしてどきどきさせてゐるのを空いた鳥籠に入れた。晩にはひねつて	70 十七	そこへいきなり人が出て来たので驚いて飛び立つたから、ばたばたと上の方であわてる計りで、足許のもと這入つて来た水抜き穴から逃げ出す事が出来なくなつたのであらう。大雪にて外の餌が拾へないから腹がへつてやつて来たに違ひない。閉め切つた玄関の中を追ひ廻して二匹とも捕へ、小鳥籠に入れた。ひねつて晩には
143 一	考へた 可哀想だが、この頃の 無くなつては、先ず	71 三	思つた 可哀想だがこの頃の 無くなつては先づ
143 二	思つた。しかしそれならば後で籠から出して殺すよりつかまへた時に、序に	四	考へた。それならば後で殺すより 捕へた時に序に
143 三	取つても、その方が 思つたりした。ノ	五	取つてもその方が 思つたりした。(改行なし)
143 四	座に歸つてもう一度お膳に坐り、大分さめたお粥を嚙つた	五	座に返つて大分冷めたお粥の残りを嚙つた
143 五	何となくそこいらが ぢつとしてゐると、どこかが泣き出した様な所がある。お椀の底に残つた冷たいお粥を	六	何だか 泣き出しさうな気持もある
七	すすつたら、ふつと涙がこぼれさうになつた	七	考へたら 殺して食はうと云ふのが 殺生をしない
八	考へて見ると 殺して食ふと云ふのが 殺生はしない	八	或は更に雀を
九	或は雀を	八	云つて玄関の
十	云つて、玄関の	十	(ナシ)
十一	二羽が後先になつて、向うの家の雪の積もつた屋根を越して行つたと家内が云つた。 軽くなつた。ノ	十	軽くなつた。(改行ナシ)

頁 行数	「雀」(底本福武書店版全集第十二卷)	頁 行数	『東京焼盡』(底本福武書店版全集第二十三卷)
143 十二	<p>晦日の二十八日になればよその配給を借りられる当てあり。それを借りて配給までをつなぐとして、今日のこの一升で二十八日までの六日を過すなり お粥はいよいよ薄くなる可し 〔ナシ〕</p>	71 十一	<p>晦日二十八日になれば美野の所に配給ある由なればそれを借りて配給までをつなぐとして、この一升にて二十八日迄を過す 〔ナシ〕</p> <p>先日中は古日の配慮にて何度も会社から借りて帰ったが、もうその融通もつかぬと思はれ、特に今日出社しなかつたので愈窮したのである 近所でも家内が借りられる所を借りた挙げ句なので、今日また</p>
144 十四 十六 十七 十八 三 五 六	<p>家内も近所で借りられる所を借りつくした挙げ句なので今日また それで空しく二三軒歩き廻つたらし 窮すれば、水抜き<small>の小さな穴から</small> 大して違つた所もないと後で考へた 午後二時五分、警報が さうである。(改行なし) 終つた所へ 解除。/ 当日なり 似たり。/</p>	72 十四 十五 十七 十八 三 四 五 六	<p>それで二三軒歩き廻つた 窮すれば止むを得ない。玄関の水抜きの穴から 大して違はないと後で考へた 午後二時五分警報が さうである。/ 終つたところへ 解除。(改行ナシ) 当日也 似たり。(改行ナシ)</p>